

交流会で鏡開きをする
香川副校長(右)と横
田級長



第42回 '11年1月12~29日

労働リーダーシップ コース報告

金属労協が主催する伝統の労働リーダーシップコースの第42回が、2011年1月12日から29日まで、京都・関西セミナーハウスで開校した。北は栃木、南は熊本から41名の受講生が参加(うち女性3名)し、合宿形式で研さんに励んだ。受講生は、「時代の求める労働組合の役割」をメインテーマに、労働法、労使関係論、国際労働運動論など体系的な講義を受講するとともに、4回にわたるゼミナールを通して職場・組合における課題について指導講師のもとで討論を行うなど、同じ金属の組合の仲間とともに、友情を育みつつ全人格的な多彩な研修を受けた。42回までの修了生は累計1,423名に達した。



セミナーの全体ミーティング



英会話/運命の赤い糸



鈴木顧問の講義「戦後労働運動と労使関係の変遷」



雪だるまと記念撮影(関西セミナーハウス 玄関前広場)



第1週

全てに新しきスタート

1月12日開校式は琴の演奏で幕を開けた。冒頭平田哲校長の「『よく学び、よく遊べ』をモットーに、この文化と自然と人の和に恵まれた関西セミナーハウスの場で、合宿生活を通して、もう一度、組合活動の原点について、みんなでじっくり考え学びあうときとしてほしい」との式辞の後、主催者、各来賓から挨拶を受けた。午後はオリエンテーションの後、「貿易ゲーム」というグループ形成を目的としたゲームを行った。同じゼミナール(班)とはいえず、初対面でまだ名前も知らない者同士が協力し合いながら進めて行くゲーム

も。初めは表情が硬かった受講生も、ゲームが進むにつれしだいに気持ちもほぐれてくるようだった。夜の全体ミーティングではまず全員が自己紹介を行い、名前と顔を一致させた後、班別に班長、副班長、座長などを選んだ。班長、副班長10名で全コースの運営を担当する実行委員会を構成し、その中から1名級長を選出する。ヤマハ発動機労組の横田芳治さんが立候補に名乗りを上げ、全員の賛同の拍手で横田さんを級長に選出した。この後、ラウンジでこれから2週間半の健闘を誓い、全員で乾杯し、初日を終えた。



開校式で式辞を述べる平田校長



初日の晩、2週間半の健闘誓い乾杯!

【開校式での挨拶から】

壮に学ばば老いて衰えず

八田 英二 労働リーダーシップコース名誉校長
(同志社大学学長)

このコースには『幅広い知識の習得』、『ゼミを通じた講師と受講生同士の徹底した討論』、『受講生同士の仲間づくり』という3つの目的がある。佐藤一斉の『言志四録』に、『小にして学ばば、即ち壮にして為すことあり。壮にして学ばば老いて衰えず。老いて学ばば死して朽ちず』とある。生涯学習の一環として、この3週間、充実した時を過ごしてほしい。



「学ぶこと」は自分を変えること

西原 浩一郎 金属労協議長

1964年のJC結成直後、高い識見の組合リーダーの育成の必要性を感じて、欧州労組に見習って、JCは大学との提携による労働リーダーシップコースを1967年に開設した。『学ぶこと』は自分を変えることである。このコースを通して、これから皆さんが労働組合活動に取り組む上での基軸を自ら作ってほしい。



芳治級長からの「みんなで力を合わせて2週間半元氣一杯乗り切ろう」との挨拶で2日目目がスタートした。ラジオ体操当番の熊崎さんの指揮でラジオ体操を行い、散歩へ。今日の散歩のコースは、修学院離宮脇の砂防ダムまで。砂防ダムの前では最初の記念撮影も行った。続いて、英会話の1回目。クラス分けは決定済み

であるが、担当の先生(米国人留学生)は決まっていない。どの先生に当たるのか皆の期待がふくらむ中、「運命の赤い糸」によって担当の先生が決定。各クラスに分かれ英語での自己紹介から始まった。午前中は当コースの最重要プログラムであるゼミナールの1回目。大会議室に全員集合し、各ゼミ講師



砂防ダムへの朝の散歩

と対面。講師からゼミの狙いと進め方について説明があった。ゼミナールは、平田ゼミ「労働組合と人間」（担当講師・平田哲校長）、香川ゼミ「労働組合と世界」（担当講師・香川孝三副校長）、石田ゼミ「労働組合と職場」（石田光男運営委員）、中田ゼミ「労働組合と社会」（中田喜文運営委員）、富田ゼミ「労働組合と働き方」（富田安信運営委員）の5つから成っている。担当講師の指導のもと受講生が主体的に労働組合活動に携わる上での問題・課題を解くことを目的にしている。今日は第1回目ということで、自己紹介を兼ねながら職場や組合での課題を紹介し合った。今後、計4回にわたって議

論を重ね、個人レポートの作成、そして最終的にはゼミナールごとにまとめの発表を行う。
昼休みには、各ゼミ交代で日本の伝統文化を学ぶ「お茶」も体験する。トップバッターは何でも一番を目指している香川ゼミ。昨日初めて会ったとは思えないほど和気藹々で笑い声が絶えない様子に、長年お茶の指導をしていたらいている講師の松本先生も、驚くばかり。お茶の作法を教わりながらの楽しい時間があつたという間に過ぎていった。
午後からは4つの柱に基づいた講義もスタート。鈴木勝利金属労協顧問による「戦後の労働運動と労使関係の変遷」を皮切りに第1週では、

「戦後世界経済を振り返る」（猪木武徳国際日本文化研究センター所長）、「組合戦略づくり」（神田良明学教授）、「労働経済論」（中田喜文同志社大教授）の講義を受けた。

13日夜の講義の「ファンタジーグループ」（日高正宏神戸女学院大教授）では、言葉をかみ砕かず、フィンガーペインティングの技法を使って、グループで心理的交流を深め合いながら、一つの作品を仕上げる実習を体験した。

14日午後の講義の「組合戦略づくり」では、労働組合の戦略づくりのノウハウを学び、実践事例として「労働組合を活性化するためには？」というテーマでグループディスカッションを行った。約1時間「労働組合の存在価値とは？」「組合員が労働組合に求めているものは何？」な



ファンタジーグループでのフィンガーペインティング

ど、日頃疑問に思いながらもじっくりと考える時間がない問題点を洗い出していた。最後には議論の結果を模造紙にまとめ、全員の前でグループごとに発表した。1時間という短い時間で解決案までたどり着くことはできなくても問題点が明らかになったことで、講義の目的のひとつが達成された。

第2週

一面の銀世界

第2週目は雪で始まった。ゼミナールハウス周辺も10センチ以上の積雪。駐車場には、胸に「JIC」と書かれた雪だるまの姿も。しかし、ほのぼのとした雰囲気もここまで。1月17日は、前夜から降り始めた雪の影響で、東海道新幹線に1時間半程度の遅れが出たのははじめ、京都市内も大渋滞。タクシー乗り場にも長い行列ができ、いつ来るともわからないタクシーを待たなければならなかった。週末家に帰っていた受講生もこの雪による大混乱に遭遇した。運良くタクシーに乗れたとしても道の凍結によりタクシーが坂を上れず、途中で降ろされそこから徒歩。苦労してゼミナールハウスまでたどり着いた受講生も続出した。その苦労の甲斐もあり、午前中の



鞍馬山へ散策



大坪清レンゴウ社長による特別講演「経営と人間」



河野前回級長から横田級長へエールを贈る



小島正剛顧問による講義「国際労働運動論」



早川一光先生による講義「地域福祉論」

講義は、開始時間が遅れはしたが予定どおり行うことができた。また昼休みには、雪の多さに驚きながらも、中庭では童心に戻って雪合戦をする受講生の姿が見受けられた。

そのような雪の中、前回第41回労働リーダーシップコースの河野級長が、激励に訪れた。午後の小島顧問の講義終了後、受講生みんなに激励の挨拶をした後、第42回コースの横田級長に樽酒を贈り、エールの交換をした。この樽酒は、2日後に開催した交流会の冒頭鏡開きで利用され、会を大いに盛り上げた。

ちょうど折り返し点の19日には、午後から全員で、鞍馬山に向かった。当初は、鞍馬駅から鞍馬寺、鞍馬寺から山を越えて貴船まで徒歩で移動する予定であった。しかし積雪のため、残念ながら徒歩で登ることができず鞍馬寺まではケーブルカーを利用することになった。鞍馬寺では「鞍馬山の自然と歴史」について講話を聴き、いかにして鞍馬山の自然が守られてきたのか理解を深めた。その後、「行けるところまで」ということで鞍馬寺を出発、積もった雪を踏みしめながら「源義経公背比べの石」まで行き、今年の「鞍馬山散策」は終わった。少々、歩く距離に物足りなさを感じながらも、良い息抜きに

なったとの感想が聞かれた。そしてその夜は、交流会。毎年、交流会をきっかけにして受講生同士の距離がぐっと縮まると言われている名物のプログラム。平田校長を初め運営委員の先生方や英会話講師、セミナーハウスのスタッフも参加して交流を深め、後半への鋭気を養った。

翌20日の夜は、討論会を行った。討論テーマは、各班から選ばれた討論会実行委員会で検討した結果、①「ワークライフバランス」(座長…大木)、②「労働組合の存在価値」(座長…鍋田)、③「メンタルヘルス安全・衛生」(座長…坂下)、④「組合役員の働き方」(座長…青木)、⑤「広報教員」(座長…今川)となった。各自興味を持ったテーマのテーブルに座り、討論会実行委員の司会のもと、自由闊達なディスカッションを行った。



討論会で自由闊達なディスカッション



上：浦坂純子先生による「統計学」の講義・実習
下：シュベネマン先生による哲学の講義

2週目最後の22日には、段ボールメーカーで有名なレンゴー(株)の大坪清社長をお招きし、特別講演「経営と人間」をテーマに、自身の経営哲学、経営理念などについて話を伺った。

第2週では、この他、「地域福祉論」(早川光総合人間研究所所長)、「労

第42回

労働リーダーシップコース 個人レポートテーマ

1月28日、本コースの集大成である「ゼミナールまとめ」でゼミ毎に個人レポートの発表、そして全体で各ゼミのまとめの発表を行った。コース期間中、計4回にわたり職場・組合での課題を討議しあつた成果である個人レポートのテーマは以下の通り。

★平田ゼミ「労働組合と人間」(8名)
テーマ「職業と人生の意味を考える」
指導講師・平田哲・労働リーダーシップコース校長(NPOアジアポランティ

アセンダー代表) 「人との関わり職業との関わりによる生きがいの変化」(岡田隆義・全本田労働中央執行委員)、「仕事と豊かさ」(寺戸裕司・マツダ労組安全健康推進担当室長)、「現代日本の雇用について」(現代日本

アプライアンス労組自販機支部書記長)、「職業と人生の意味を考える」(熊崎孝昭・パナソニック電工労組中部営業支部委員

働法」(香川孝三大阪女学院大学教授)、「国際協力論」(平田哲AVC代表)、「持続可能な地域社会」(植田和弘京大教授)、「労働組合のための財務分析入門」(石井康彦高千穂大准教授)、「日本型コーポレートガバナンスをめぐりて」(大平浩「明学教授)、「金属労協の運動課題」(若松英幸金属労協事務局長)の講義を受けた。

第3週

夜遅くまで各ゼミで自主的に研鑽

第3週、いよいよ最終週。各ゼミでは空き時間に自主的に集まり、

28日の「ゼミナールまとめ」に向け、個人レポートの作成、ゼミ発表の取りまとめを行う。最終週は夜の講義もないたため、夕食後、じっくりとまとめに取り組むことができる。

科学技術の課題」(政池明京大名誉教授)であった。

ゼミナールは25日午前のゼミ④では、各自の職場・組合での課題の解決案の発表とまとめを行い担当講師からのアドバイスを受けて、28日全体発表に向けての準備に取りかかった。そして28日には、最後の朝の体操ではラジオ体操の代わりに西川さんの指導でビリーダンスをした後、午前中ゼミ毎に個人レポートを発表しあつた。そして午前11時半から、香川ゼミを皮切りに、午後から石田ゼミ、中田ゼミ、富田ゼミ、そして平田ゼミの順番でゼミ発表を行い、各ゼミで研究・討議した成果を全員で分かち合った。

1月29日朝、前夜の雪も止み、快晴のもと、8時45分から大会議室での出発(たびだち)の集いでは全員が口の字スタイルに座り、横田級長を皮切りに全員がこのコースに参加しての感想を述べあつた。10時半から閉校式を行い、41名の受講生一人ひとりに平田校長から修了

石田ゼミの発表風景



★香川ゼミ「労働組合と世界」(8名)

テーマ「21世紀国際社会における労働組合の役割」

指導講師：香川孝三・労働リーダーシップコース副校長（大阪女学院大学副学長）

「国際社会における労働組合の役割」（共同研究）鍋田浩雄・三菱重工労組名航支部執行委員、三澤篤志・パナソニック電工労組伊勢支部書記長、及川隆之・三洋電機労組営業総合支部副委員長、岡井将人・パナソニックAVCネットワークス労組システム支部副書記長

「急激に変化するアジア・中国への対応」（共同研究）菅原俊彦・三菱自動車工業労組岡崎支部常任執行委員、小倉康隆・コマツユニオン茨城支部書記長、吉村健吾・神鋼連合執行委員、西川太・住友電気工業労組大阪支部執行委員

★石田ゼミ「労働組合と職場」(8名)

テーマ「労働組合機能の再発見とフロントピアの展望」

指導講師：石田光男・労働リーダーシップコース運営委員（同志社大学社会学部教授）

「働きがいのある労働条件とは」～評価制度の適正な運用方法～（澁谷圭・全本田労連中央執行委員）、「働きがいのある労働条件とは？」（廣田貴大・三菱自動車工業労組京都支部常任執行委員）、「働き甲斐を高める労働組合の活動について」（田伏勇一・パナソニックAVCネットワークス労組ネットワーク支部岡

山地区書記長）、「働きがいのある労働条件にするには」～評価制度の適正な運用について～（越川直哉・三洋電機労組兵庫徳島支部書記長）、「目標面接をきっかけに多様な働き方を実現する」（青木麻衣・パナホーム労組中央執行委員）、「目標管理制度の改革」（横田利幸・コマツユニオン小山支部副委員長）、「生きがい・働きがいのある労働環境の構築にむけて」（奥信明繁・JFEスチール福山労組執行委員）、「仕事管理の考察—目標管理・評価制度を切り口として—」（三羽克洋・全労済本部共済開発部）

★中田ゼミ「労働組合と社会」(8名)

テーマ「仕事と処遇」納得性のある給与の決め方と水準」

指導講師：労働リーダーシップコース運営委員（同志社大学大学院教授）

「目指すべき賃金体系について」（新開寛・トヨタ車体労組執行委員）、「将来を見据えた日本の技術者の賃金制度」（石田傑・本田技研労組栃木研究所支部書記次長）、「わが労組の賃金制度における課題について」（川又敏之・富士重工労組常任執行委員）、「仕事と処遇」納得性のある給与の決め方と水準」（山根一郎・パナソニックAVCネットワークス労組映像・ディスプレイ支部書記次長）、「賃金制度とその納得性について」（江頭隆行・パナソニック電工労組愛知支部委員長）、「仕事と処遇」納得性のある給与の決め方と水準」（皆芳浩巳・ダイキン工業労組淀川支部書

（記長）、「当社の賃金制度の課題と方策について」（末武研一郎・JFEスチール千葉労組執行委員）、「神戸製鋼所の賃金体系の課題と私の提言」（大木裕・神戸製鋼所労組神戸支部執行委員）

★富田ゼミ「労働組合と働き方」(9名)

テーマ「ワーク・ライフ・バランス」

指導講師：労働リーダーシップコース運営委員（同志社大学社会学部教授）

「ワーク・ライフ・バランスと企業の競争について考える」（今川貴博・全本田労連中央執行委員）、「ワーク・ライフ・バランス」（松永晴夫・本田技研労組熊本支部書記次長）、「ワーク・ライフ・バランスを達成するために」（宗藤裕之・全国マツダ労連事務局次長）、「ワーク・ライフ・バランス実現に向けた課題と解決策」（山中しのぶ・日本電気労組本社支部執行委員）、「職場のワーク・ライフ・バランスの深化に向けて」（植竹毅・パナホーム労組中央執行委員）、「研究・開発者のワーク・ライフ・バランスを考える」（小西雅也・ダイキン工業労組滋賀支部書記長）、「ワーク・ライフ・バランスと総実労働時間の削減について」（風呂中峰雄・神戸製鋼所労組加古川支部執行委員）、「ワーク・ライフ・バランスについて」（大谷和弘・三菱重工労組高砂製作所支部執行委員）、「ワーク・ライフ・バランス」（豊田茂・日立電線労組日高支部執行委員）

証を授与した。その後、中庭で記念撮影を行った後、アゴラホールで打ち上げを行った。席上、第42回受講生から、会場となった関西セミナーハウスに感謝の気持ちをこめて記念品が贈呈された。



閉校式での受講生答辞を述べる横田芳治級長



閉会式後の全員での記念撮影

受講生代表コメント

級長／平田ゼミ・班長／
ヤマハ発動機労働組合中央執行委員
横田 芳治 よこた・よしはる



級長に立候補、他の誰よりも貴重な体験

1月12日のコース初日はこれからどんな研修が待っているのか？自分以外にはどんな受講生が来ているのか？皆と仲良くやっていけるのか？など、不安と期待で胸が一杯だった事を今でもハッキリと覚えています。

そんな初日の夕食後、ゼミの班長・副班長の選出、引き続き級長の選出がありました。班長に任命された私は、せっかく「リーダーシップコース」という名の研修に来て自分自身のリーダースキルを磨きに来ているのに、リーダーをやらなければ何の意味も無い！という熱い想いに駆られ、級長に率先して立候補させて頂く事に。内心、「またやっちゃったかな…」と思いながらも今になって思えば、あの時の自分の判断は間違ってたかと思えますし、他のどの受講生よりも貴重な経験ができたはず、と密かに感じております。

級長の仕事は、日々開催する実行委員会の進行から、事務局からの連絡事項の伝達、そして最終日の答辞など、決して負荷の大きい仕事ではないと思っておりましたが、やはり慣れない環境や出会ったばかりの人たちをまとめ上げないといけない点など、こんな私でもそれなりのプレッシャーやストレスがあったことも事実です。しかし、どんな時でも、各ゼミの班長・副班長をはじめ、受講生の皆さんが本当に従順に(?) わがままを言わずについてきてくれたこと、そして優しく支えてくれた事が本当にありがたく、改めて皆さんにはお礼を言いたい気持ちで一杯です。

平田ゼミ・副班長／
コマツユニオン本社営業支部書記長
小野 英之 おの・ひでゆき



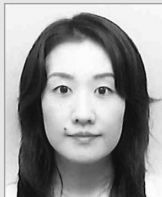
今後の人生の糧となる貴重な体験

開講日であった1月12日が近くにつれて、研修を受講する上での緊張と、更には会社生活の中で約3週間も不在にしたことがなかったことによる不安がありましたが、職場を離れて勉強に専念できるのは早々ないし、研修終了後には有意義な時間だったと言えるようにしたいと思い、研修当日を迎えました。いざ研修が始まれば当初抱えていた不安が払拭され、同じ気持ちを持つ仲間と産別の枠を超え、組合活動を行っていく上での悩みや相談を、時には(ほぼ毎日?) 酒を酌み交わしながら夜遅くまで議論し、また意見交換を通じて交流を深めることができ、大変貴重な経験となったことは今でも忘れることができません。

私が属した平田ゼミでは、「労働組合と人間：職業と人生の意味を考える」をテーマに各人毎に参考文献を基に、個人毎の取り組みテーマを発表し、個人レポートの作成とまとめを行いました。それぞれ壁にぶつかってもお互いの考えを尊重しながら助け合いながら、ゼミとしてテーマ発表も無事に終えることが出来たのも仲間の協力あってこそだと思っています。

また、講義を通じて得ることの出来た知識や、労働組合役員としての意識向上にもなり人生の糧となる貴重な経験でしたし、それをもち帰って今後の活動に組み入れていけるよう取り組んでいきたいと思っています。

平田ゼミ
池谷 聖子 いけたに・せいこ



個性的で優しい仲間との出会い

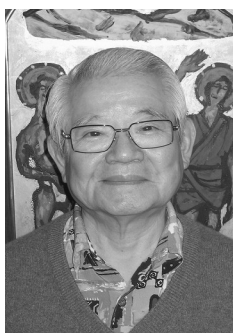
あの楽しくハードな2週間半を遠い昔のように懐かしく感じるの、私だけでしょうか？夢のような非日常的な世界から現実に戻り、このように感じるのかもしれない。

当初は組合役員になったばかりの参加で不安も大きかったのですが、一定期間業務から離れてあれほど充実した内容の研修に取り組めたこと、そして何より今回参加された“個性的で優しい”仲間と出会えたこと等、得るものの多い貴重な機会にただけ、今回参加できて良かったと実感しています。また、事務局や関西セミナーハウスの皆様のきめ細やかな心配りには感謝の気持ちで一杯です。

平田ゼミでは「職業と人生の意味を考える」というテーマのもと、急激に変化する社会の中でいかに生きるべきかを文献を参考に取り組みました。産別を越えたメンバーとの議論からは視野の広がりを感じ、一方で組合役員として至らない点の気づきを得ました。また、自らの職業観について考え直すよい機会にもなりました。

平田ゼミ

労働リーダーシップコース校長／
アジアボランティアセンター代表
平田 哲 (ひらた・さとし)



ゼミナール担当講師のコメント 1

「人間」を基本に 労働運動の原点を学ぶ

まずもって第42回コースが、J C加盟単組から41名の受講生が参加し、大いなる成果をもって無事終了したことに、受講生を送り出してくださった組合の方々、ご家族の方々に感謝申し上げたい。このIMFJ Cが主催する労働リーダーシップコースが42年間もの長い間、継続してきたことは不思議なことである。初代校長の竹中正夫先生は、発足当初から「人間」を基本にこの教育に取り組まれてきた。ゼミナールも、竹中校長

自身が担当されたテーマは「労働組合と人間」であった。今、私がおのゼミを引き継いでいる。考えて見れば、労働運動と言っても、その基本は「人間」である。経済も、経営も、企業も、そして私たちの労働運動も、「人間」を基本に、「人間」を根幹に据えない運動、活動はやがて、道をそれて、変質するか、消えてなくなってしまうことも多いのが歴史の常である。

この労働リーダーシップコースが続けてきた理由もそこにあるような気がする。労働運動の原点に「人間」を置いて、職場のこと、働き方、賃金、社会についてみんなで考えてきた。ものづくりという共通の土俵の上で、担当講師と受講生、受講生同士それぞれが、企業の枠を越え、産別の枠を越え、「一人の「人間」として教え、教えられる切磋琢磨の関係が、わが労働リーダーシップコースの真骨頂と言えよう。



平田ゼミ

香川ゼミ



香川ゼミ

労働リーダーシップコース副校長
大阪女学院大学副学長・教授

香川 孝三 (かがわ・こうぞう)



受講生代表コメント

香川ゼミ・班長/
全神戸製鋼労働組合連合会執行委員
吉村 健吾 よしむら・けんご



「何事にも一番をめざす」をモットーに

まず、私に IMF-JC 労働リーダーシップコース研修の機会を与えて下さった方々へ感謝申し上げます。

研修は様々な分野において専門性の高い大学教授の方々から講義があり、全てに興味をもって受講することができました。今後の様々な場で活かしていきたいと考えています。

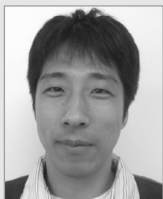
私は香川教授のゼミに入り、班長に選出いただきました。ゼミの参加者は個性派揃いであり、2番目に若い私が班長となることに不安を感じましたが、皆さんの積極性と高い責任感に触れ、その不安はすぐに吹き飛びました。また、こうした個性豊かなメンバーに様々なことをご教示くださいました香川教授に感謝申し上げます。研修の後半は発表資料作成のため、色々な議論を交わしコンセンサスを得ながらすすめ、一致団結できたと思っています。

また、香川ゼミの特徴は、交流会の発表やゲーム等で「何事にも一番をめざす」をモットーに取り組んだことでした。結果は必ずしも一番ではなかったのですが、参加された皆さんにも印象に残る班になったのではないかと考えています。

最後にゼミのメンバーだけでなく参加されたすべての方々に感謝したいと考えています。鞍馬山で雪合戦したことや深夜までアジアカップを観戦したこと、月曜日に大雪が降り立ち往生し、大遅刻したこと等良い思い出ができました。また、幅広い年齢層の方々と「学ぶ」というひとつの目的に向かって研修を受けることができ、ひとり一人に対して絆ができました。これからもこの絆を大切に、私の財産にしたいと考えています。皆さんこれからもよろしくお願ひします。

香川ゼミ・副班長/
パナソニックAVCネットワークス労組
システム支部副書記長

岡井 将人 おかい・まさと



ゼミメンバーと連日深夜まで白熱の論議

第42回の労働リーダーシップコースに参加させていただきました。事前に配布されたテキストを拝見した時に、今までに見た事もないような単語が並んでおり、本当にこのコースを修了できるのだろうかという不安と、産別を超えた仲間と知り合える期待が入り交じりながら、年始に降った雪が残っている関西セミナーハウスに総勢41名のメンバーが集まり2週間半の研修がスタートしました。

研修内容については、労働運動関係の講義が中心となっておりますが、日本はもちろんの事、世界に留まらず宇宙の視点に至るまでの内容となっており、非常に充実した研修カリキュラムで、頭の中がいっぱいになり整理するのに困ってしまいました。また、ゼミでは香川先生の指導のもと、大きく2つのテーマを設定し、メンバーと連日深夜まで白熱の論議を行い、期間中に一つのチャートにまとめる事ができたのは、何事にも変え難い経験となりました。

今回、この研修を通じて学んだ貴重な知識、人と人の繋がり、全てを励みにしながら頑張っていきたいと考えます。

最後に、IMF-JC事務局とセミナーハウスの皆様、講師の先生方、ゼミの香川先生、そして、第42回のセミナーに参加した全ての仲間に心より感謝いたします。

ゼミナール担当講師のコメント2

「国際社会における労働組合の役割」学ぶ

今回のゼミでは受講生の自主的かつ積極的な参加でスムーズに進めることができた。各自のレポートやゼミ全体のまとめの報告に際し、そのことが示されていた。テーマは「国際社会における労働組合の役割」と、その中で、「中国の経済的地位の上昇にどう対応すべきか」という問題を取り扱った。経済のグローバル化や国内の少子高齢化が進展して、日本の企業は海外での生産や貿易・取引によって生き残りを図っていかざるを

えない状況にあり、労働組合としても、それにどう対応すべきかという問題に関心を向けざるをえない。報告では、企業とともに海外にどう関わっていくことができるかという視点で報告がなされた。その際に、進出した先の企業で結成された労働組合とどのような関係を結ぶべきなのか、友好的な関係を構築できるのか、利害が対立する場合は生じないのか。さらに国内では雇用の場が減っていくという問題がある。親企業では配転や他の企業への再就職のあっせんなどで雇用の確保ができる可能性が高いが、下請企業や関連企業の従業員を雇用を

どうするかという問題が生じる場合、親企業の労働組合としてはどうすればいいのかという問題がある。国際問題は海外での問題だけでなく、国内での問題も含んでいる。親企業の労働組合として、どこまで目配りができるかが問われてくる。リーダーシップコースでは毎年受講生が変わるので、前年の議論を積み重ねることができないのが残念なことはある。

香川ゼミの仲間たち



受講生代表コメント

石田ゼミ・班長/
JFEスチール福山労組執行委員
奥信 明繁 おくのぶ・はるしげ



労働運動の基礎を学び 友との絆を最高の宝物に

同志を持った総勢41名の方々と共に約3週間に亘る共同生活(研修会)のなかで得たこと、また、数々の思い出を振り返らせていただきます。

本セミナーについては、前半では戦後の労働運動や世界経済労使の関係について、中盤では労使関係・国際的な労働運動論、そして終盤では日本経済論および男女共同参画の職場と社会づくりといった内容の充実した講義となっていた。

講義以外にも早朝には散策や英会話をを行い、規律ある生活を送ることができた。そのなかでも、散策前のラジオ体操については、場を和ませるため、オリジナルティーを交えた体操をするなど中盤以降は、一体感が生まれたように感じられた。

私にとって、ゼミナール(以下ゼミという)は特に思い出深いものとなった。事前にグループ編成がされたメンバーと共に、我々のゼミでは、「労働組合と職場」というテーマについて、自組織の現状把握および課題に関して議論を交わし、最終的には、いま労働組合に求められている「働きがいのある労働条件」について検討し、ゼミとして今後の考え方および方向性について整理することができた。また、日夜集まり、資料をまとめるなかで結束という一番大切なものも自然と得ることができ、時間を忘れて交流を図られたことが本当の意味で、本セミナーでしか経験ができない部分と感じています。

石田ゼミ・副班長/全本田労連中央執行委員
澁谷 圭 しぶや・けい



出会った仲間、学んだ経験を 今後の活動に生かしたい

過去に参加した諸先輩より様々なエピソードを聞き、「不安半分・楽しみ半分」の気持ちで当日を迎えた。金属産業に働く仲間たちではあるが、様々な組合、そして様々な人たちが集まっており、約2週間半の期間本当にやり切れるのかが私の思った第一印象でした。

期間中、寒冷前線の南下に伴い京都市内にも時より積雪もあり雪景色を見ながら、組合活動を中心とした多彩な講義を受け、歴史を知ったり、また、いままで学ぶ事が出来ないもの学べることが出来たりと、40代に突入した私の頭の中がオーバーフロー気味になりつつも、心の中で鞭を打ち受講していました。

講義はもちろん、今回一番の得たものは「仲間」でした。最初は、よそよそしい感じでありましたが、日が経つにつれコミュニケーションを深められ、ゼミにおいては、課せられたテーマに対して深い議論が行われ、各自の持ち場や役割を十二分に発し発表の場まで進むことが出来ました。

職場に戻り約一ヶ月が経過して思うことは、家族から離れた職場から離れた環境という、おそらく二度とない経験をさせてもらったという感謝の気持ち、出会った仲間、そして学んだ経験を今後の組合活動や職場に生かしていくことが私の責務と強く感じています。

石田ゼミ/パナホーム労組中央執行委員
青木 麻衣 あおき・まい



得られた知識と経験、 仲間とのつながりは自分の財産

よく言われる。「20代は経験だ」。だから日ごろは何でも前向きに取り組むようにしている。

とはいえ、人生経験も浅く、また組合役員になって間もない自分がリーダーシップ研修だなんて荷が重い。参加する前はこんな思いだった。

参加した結果、確かに難しいと思うこともあった。でも、当初の思いは研修が始まって2週目には吹き飛んだ。授業や交流を通して、産別を越えた多くの皆さんとのつながりができ、日ごろの組合活動への興味・問題意識を持つきっかけもできた。

特に、ゼミの取り組みでは、狭い世界しか知らない自分に改めて気付かされた。同じゼミの皆さんからは多くのことを教わったし、客観的に「パナホーム」「パナホーム労働組合」を見ることができたのも、大きな経験だった。

この研修で得られた知識と経験、そして仲間とのつながりは自分の財産になったと思う。これらが単なる思い出に終わることのなきよう、まだまだ未熟だが、これから一生懸命活動に取り組んでいきたい。

石田ゼミ

労働リーダーシップコース運営委員/
同志社大学社会学部教授

石田 光男 (いしだ・みつお)



ゼミナール担当講師のコメント 3

「労組にとつての目標面接制度課題」に絞り議論

参加者は奥信さん(JFEスチール福山労組)を班長に合計8名。例年のことであるが、まず職場で直面している問題点を自由に発表してもらうことから始め、「労働組合にとつての目標面接制度課題」にテーマを絞った。発表に至るまでよくチームワークがとれた、すばらしい人たちとの語りであった。

この問題の重要性については、この間の人事・賃金制度改革が個人間の評価結果が大きく処遇に反映する

仕組みをもたらしたことから、つとに指摘されてきた点である。このゼミで相互に認識を新たにした点は次の諸点であった。第一は、目標面接で成果評価や能力評価については企業は重視しているけれど、キャリアデザインや多様な働き方の要望は賃金や一時金に直接反映しないために労使ともに重要視されていないが、これの実効性をたかめる取り組みを強化しなくてはならないこと。第二に、そこから、経営対策の一層の強化(目標管理での多様な働き方と企業の事業計画・要員計画の整合性、情報の共有化)、組合の仲間同士での

多様な働き方を認め合う規範やルールの構築、多様な働き方と処遇との関係や権利行使の手続きに関する労働協約の整備が求められる。雇用関係のルールの個別化が深く進行している日本では、個別化を掘り下げて個人個人の自律的な働き方の実現にまで深めると同時に、他方で自律性が個人の「わがまま」や企業活動との不整合、処遇の不公平に陥らないように、労働組合の集団的ルール形成、労使協議、コミュニケーション重視を新たな観点から活性化するために直面している、ということをも

正しく認識することができた。

石田ゼミの仲間たち



中田ゼミ



受講生代表コメント

中田ゼミ・班長／
パナソニック電工労働組合愛知支部委員長
江頭 隆行 えがしら・たかゆき



連日の深夜にわたる宿題で
一層の親睦深める

産別を超える仲間との18日間の研修、たいへん貴重な経験でした。また、今となっては、たいへん良い思い出ともなっています。研修初日は、お互いを知らない緊張感と長期にわたる研修への不安が、私の心を支配していましたが、それもつかの間、いつの間にかこの研修を楽しんでいる自分に気が付きました。

講義では、それまでの自身の行動・考え方に、新たな気づきを与えていただきました。

中田ゼミにおいては、普段知ることのできない他社の賃金制度等を共有し、議論することができまし、そのメンバーとは、連日深夜にわたる宿題により、(大変お疲れ様でした)より一層の親睦を深めることができました。このことが一番の収穫かと思えます。

これからも、18日間、寢食(付け加えて学飲楽)を共にした受講生の輪を大切にしていきたいですね。

最後になりますが、この労働リーダーシップコースを支えていただいた関係者の皆様、関西セミナーハウスのスタッフの皆様に感謝と御礼を申し上げます。大変お世話になりました。ありがとうございます。

中田ゼミ・副班長／
JFEスクール千葉労組執行委員
末武 研一郎 すえたけ・けんいちろう



ノアーズコーナーの思い出

京都から帰ってきて2ヶ月以上が経過し、本来の業務、震災への対応、統一地方選挙対応と、目まぐるしく業務に追われる毎日です。

私は千葉からの参加でしたので前日からの出発でしたが、このコースに参加するにあたりひとつ気になることが… 選択していたゼミは『中田ゼミ』。事前に賃金についての事前調査という宿題を仰せつかっていました。もちろん仕上がっている訳もなく、不安ななかでの開校式でした。

コースでの楽しかったことといえば『貿易ゲーム』これは、実際にゼミが始まる前だった為、心の底から『楽しい!』と盛り上がりました。もうひとつはやっぱり『ノアーズコーナー』の思い出です! 他のゼミが夜ロビーで盛り上がっていてもウチのゼミだけは深夜までノートパソコンを開いて勉強(と酒)をやっていた事ですね! これが一番記憶に残っています。(ずっと飲んでたような気も…?)

2週間半の集団生活でしたが、年齢、性別を超えてみなさんとは一気に仲良くなり、そしてあっという間に別れが来た。という感じです。参加者のみなさん、スタッフの皆さん、本当にお世話になりました。震災の影響で、今では私達を取り巻く環境も大きく変わりましたが、あの頃がとてものつかいいです。復興が落ち着いたら必ず再会しましょう。



中田ゼミ

労働リーダーシップコース運営委員
同志社大学大学院教授
中田 喜文 (なかた・よしふみ)

ゼミナール担当講師のコメント 4

新たな課題に
深夜まで取り組み
初期の目標を全員が達成

中田ゼミは今年も「仕事と処遇」納得性のある給与の決め方と水準」をテーマに、ゼミ討議を行った。今回も例年どおり、参加者全員、毎回、猛烈に課題に取り組み(取り組みまされ?)、よく頑張り、素晴らしいゼミ報告を全体発表の場で行った。担当した者として誇りに思うとともに、素晴らしいメンバーと2週間半を過ごせたこと、私にとつても大切な思い出となった。8名のゼミ生にとつても、共通の課題に

向け、仲間と共に学び、議論し、成果発表準備を助け合い、全員で取り組みだ経験が、これからの更なる成長の糧となることを信じている。

さて、今年のゼミ活動は、これまでの中田ゼミの伝統を踏襲するとともに、少し新しい取り組みも加えて、以下の3点の課題に取り組んだ。
(1) JC企業における賃金の決め方とその水準の実態を知り、その背景にある普遍性のあるロジックを理解する。
(2) 海外の同業種企業の給与の決め方とその水準を知ること、賃金の国際多様性の背景にある、その社会・文化性を理解する。

(3) そのような国内外の実態と背景にあるロジックを理解し、評価することを通して、今後の組合の賃金政策のあるべき姿について、各自の考えを確立する。

これら課題を、毎日午前、午後の授業に出席し、さらには早朝と夜にも提供される様々なプログラムをこなしながら、深夜まで取り組み、それぞれが初期の目的を見事に達成してゼミ活動を終了した。ゼミ生相互の友情と信頼は大きく深まったと思う。遠くない未来における再会を誓い、名残を惜しみながら、彼らを待つ人たちの所へと旅立っていった。

中田ゼミの仲間たち



受講生代表コメント

富田ゼミ・班長
本田技研労組熊本支部書記次長
松永 晴夫 まつなが・はるお



人生を最高に旅せよ

まずは、この研修において、事務局をはじめ、講師の方々・セミナーハウスの皆様、また英会話の先生、研修生 41 名に対しご尽力いただきまして大変感謝しております。ありがとうございます。

今回、私は「ワーク・ライフ・バランス (WLB)」について、富田先生のもと 9 名のゼミ生で色々な議論、意見、情報交換を行いました。ここに WLB についての話は長くなりますので割愛しますが、富田ゼミ 9 名は WLB を共有したことで今、確実に実践していることだろうと思います。WLB について興味がある方は、日経文庫「職場のワーク・ライフ・バランス」を熟読下さい。

話は変わりますが、研修の中盤に交流会がありました。各ゼミの出し物が異常な程にクオリティーが高い事に驚かされました。昼の講義も、夜の講義も、練習も、サッカー日本代表の応援も全ての事に対し一生懸命でした。あれほどまでに一致団結できたのは、さすが組合役員だなと感じる瞬間でした。

参加する前は、結構ドキドキでしたが、富田ゼミのみんな、級長はじめ実行委員のみんな、41 名全員、バックアップありがとう。取り留めない話になりましたが、すばらしい経験をさせてもらったと思います。

みなさんまた逢う日まで・・・「人生を最高に旅せよ！」

富田ゼミ・副班長
ダイキン工業労組滋賀支部書記長
小西 雅也 こにし・まさや



いろいろな考えが聞けて有意義だった ゼミでの経験交流

今回リーダーシップコースに参加し、始まってみるとさすが 42 回の歴史からか、すんなり入り込めるカリキュラムで何の気兼ねも無く、2 週間半楽しく過ごせました。

ゼミは「ワーク・ライフ・バランス」についてでしたが、そのアウトプットよりも、プロセスにおけるメンバーの意見というか思想に、各単組での普段の取り組みや単組の歴史的な積み上げが色濃く反映され (もちろん、それぞれの個性も大きく影響していると思いますが) いろいろな考えが聞けて有意義でした。と言いながら、ゼミの出し物 (KARA のダンス) に向けた取り組みが、一番それぞれの個性が良くわかり、カリキュラム (?) として今後も外さないでください。

労働リーダーシップコースの講義には、正直中にはつまらなく感じるものもありましたが、心理学や哲学は普段なら絶対聞けない (多分、積極的に受講しない) 内容だからこそ新鮮なものがあ、直接的なスキルアップと言うより、人間形成としてじわっと体に染み込む内容でよかったです。

富田ゼミ / 日本電気労組本社支部執行委員
山中 しのぶ やまなか・しのぶ



自分の活動の基軸づくりに多くの気づき

労働リーダーシップコースを受講し、とても貴重な経験をさせていただきました。

開校式での西原金属労協議長の挨拶で、「学ぶことは自分を変えること。変わらないと学んだことにならない。」とおっしゃられた言葉が印象的で、このセミナーを通じ、ただ講義を受けるだけではなく、労働組合活動の原点をしっかりと学び、自分の活動の基軸を作りたいという気持ちで、コースを受講することができました。実際に、講師の方々からは、今後組合活動を行う上での道しるべとなる多くの言葉をいただきました。

講義やゼミを通じては、学ぶことの楽しさ、仲間との意見交換での気づきを得ることができ、特にゼミにおいては、多くの時間を仲間と過ごし、議論を行いました。交流会やゼミ発表では、チームの力を十分に発揮できたと思っています。個々の力は小さくても、それぞれの役割を認識し生かすことにより、短期間でも結束力の強いチームが出来上がることは、新たな発見でした。

また、貴重な睡眠時間を削りながらの女性部屋での語らいは、とても楽しい時間でした。職場の話や、女性の目線からみた組合活動についてまで、短時間ですが幅広く話をしました。毎晩睡魔との闘いでしたが、とても良い思い出です。

富田ゼミ

労働リーダーシップコース運営委員 /
同志社大学社会学部教授

富田 安信 (とみた・やすのぶ)



ゼミナール担当講師のコメント 5

「時間制約」や「管理職の役割」キーワードに議論

「働き方を考える」ゼミが始まって今年で 3 年目です。今年のゼミ生には、佐藤博樹・武石恵美子「職場のワーク・ライフ・バランス」を事前に読んでくるよう指示しました。過去 2 年のゼミは、議論は盛り上がるのですが、議論が拡散してなかなか収束していかないと印象でした。そこで、今年はずみ生が「職場のワーク・ライフ・バランス」を読んで、「なるほど」、「そのとおり」などと思ったところ

を手掛かりに、議論を整理できるのではないかと考えました。

議論を整理するキーワードの一つが「時間制約」でした。会社や労働組合が長時間労働の是正にいくら取り組んでも、仕事以外にやらねばならないこと、やりたいことがない従業員、つまり「時間制約」のない従業員は労働時間を短くしようとは思わないということです。「管理職の役割」をキーワードに議論しているとき、管理職がプレイング・マネジャー化して自分の仕事に忙しく、部下の指導・育成に十分時間が取れないことが長時間

労働の一因であるという意見が出てきました。たとえば、部下が効率の悪い仕事の進め方をしているために労働時間が長くなっていることに上司が気づかないということが職場で起こっています。これには、多くのゼミ生が頷きました。

もちろん、仕事と育児の両立、時間外労働の削減、有給休暇の取得率向上など、各労働組合の個別具体的な取り組みについてゼミ生同士で情報交換してもらおうことも、私のゼミの目的です。

富田ゼミ

